

第6講 1981年3月4日の講義

文責: H 松

1. フーコーが試みてきたこと(pp.199-200)

- ✓ 主体に生じた3つの大きな変容

①問いの移動

少年愛→男女の愛(夫と妻の間の愛の問題)へ

②アフロディシアの位置づけ

結婚そのものの内部にアフロディシアを、唯一の正当な性的快楽を位置づける傾向が見いだされる

③アフロディシアの体制

結婚内部における配偶者たちの内的な関係、個人的な関係、私的な関係に分節し、結び付け、連動させる傾向が見いだされる

↓これら3つの変容を説明するテキストが...

2. 『エロス談義』(pp.200-225)

- ✓ プルタルコス『エロス談義』

・言及されている、二つの愛(少年愛・女性への愛)。

⇒アフロディシアの倫理全体の転換を、このテキストから読み解くことができる

・理解できること

①ひとつのキリスト教の性道徳がおそらくないのと同じく、ひとつの異教の性道徳がないということ

②キリスト教に認められてきた一連の道徳上の要素・原理・規則がヘレニズム、ローマの思考にも存在していること(キリスト教のみに存在しているわけではないということ)

③いかにしてキリスト教が、異教の内部で形成された道徳を統合し、新しいもの(=肉の経験)を発展させていったかということ

↓言い換えると.....今年度フーコーが説明したいのは....。

(1)いかにして異教の内部でアフロディシアという古典時代の倫理が変容し、アフロディシアの体制の婚姻中心化と呼びうるようなものが行われたのか

(2)いかにして婚姻中心化されたこの性倫理がその後キリスト教のなかに移動していったのか

(3)いかにしてキリスト教の歴史そのものの内部において、この道徳が再び練り上げられ、そして肉の経験が出現したのか

- ✓ 『エロス談義』における2つの愛の比較

・バッコンという少年の結婚にまつわる話

複数の男たちから求愛をうけるバッコン

最も情熱的にバッコンを愛するペイシアスという男性

バッコンと結婚したいがあまりに、ペイシアスの前でバッコンをさらっていくイスメノドラ(年上の豊か

な寡婦)

→人さらいのイスメノドラから、バツコンを救い出しに行き、結婚を防ぐべきかという問い

・注目すべき要素

①「女性への愛/男性への愛」

以前の文献・・・話題となるのは、少年愛/女性愛の間でゆれる成人男性

若い男を女と結婚するままだにさせるのか、それとも彼を愛し追いかける男性の支配下に返すべきか

②「対話のなかにいない、少年じしんの姿」

あれかこれか選ぶのは少年であるにも関わらず、受け身の姿勢にある。

少年にとっては恋する男と女主人のどちらを持つことがより良いのかという話にならない！

⇒少年愛はいったい何で成り立っているのか？という問題ばかりが強調される。

③イスメノドラが少年よりも明らかに年上

以前のギリシア文学・・・少しばかり裕福な寡婦との結婚は珍しくないが、笑い話として書かれていた。

⇒すでに寡婦ですでに豊かな三十路の女は美德に満ちていて非常に徳のある非常に賢い、最初の結婚のおかげで十分に経験の積んだ人物として提示される。

能動的に愛する者として描かれる。少年を導き助けてやらねばならないがゆえに知り合い、少年の長所を認め、誠実な意図をもって愛する。(=なんら卑しいこともない愛)

⇒青少年に対する同性愛の定義そのものの愛が描かれている！

※同性愛の定義・・・年上の、より豊かで、より良い立場にあり、自分を愛し、自分を誠実な目的から追いかけ、その人自身の徳と長所とによって模範や導きとして役立つことができる恋人を持たねばならない！

✓ プルタルコス挑戦

・少年を追いかける豊かで年上の女

アフロディシアの最も伝統的な倫理に対する挑戦

「男こそが裕福で能動的で年上で指導者の役を果たさなければならない」という倫理から反転
あらゆる結婚が正当なものとされ、正当化される布石

同型性と能動性という支配的な規則→結婚の倫理へ

・イスメノドラが持つ教育的状況

徳のある青少年のよい愛人が持っている全ての性質がイスメノドラにある

→同性愛に認められていた有意義な諸効果が男—女関係に移し替えられる

↓プルタルコスが示したことで・・・

✓ 結婚の意味

①同型性と能動性の原理から離陸し、二人のパートナーの徳の問題に

②結婚が同性愛がもっていた教育的変容の場に

✓ 転移

①愛の考え方を全般的に改変(愛の完全な連鎖の定義)

②完全無欠で規範的な唯一の愛の連鎖との関係性において少年愛を批判(少年愛批判)

③配偶者との関係こそが愛の連鎖と同一視されるべきであり、この愛の連鎖が実現しうる特権的な場を形づくるべきだということを確証する(配偶者の関係と愛の連鎖とのあいだでの新たな同型性の承認)

✓ 少年愛論争

・プロトゲネスVS少年愛の擁護者

プロトゲネス:「2つの愛のうち1つは自然の愛であり、もう1つは自然の愛ではない。」

少年愛の擁護者:「男の女に対する愛こそが自然の愛だ!」

プロトゲネス:「自然の愛は、ハエとそれが身を置く乳のあいだにも見いだされるのでは。エロスのような何かがあると考えることができない存在においても、自然の愛は見出すことが可能。男の女への運動は、本当の愛としては考えられないのでは」

→男の女への欲望の自然性は、エロスとは両立不可能。

少年愛が自然なものだと思わないのであれば、それは、少年愛がまとわなければならない形式のためであり、それこそが少年愛が正当化される根拠なのだ!

→他方に対する友愛、教育の必要性

少年愛=パラ・フュシン(自然に反対するもの)であり、快楽ではなく徳を求めるもの
衝動ではなく、友愛。

欲望ではなく、他者への配慮・ケア。

快楽ではなく、両者にとっての徳。

✓ プルーストの時代(19世紀末と20世紀)における同性愛

異性愛=同性愛、唯一の同じ愛という図式

この図式が、実は、プルタルコステキストでも見いだされる。

✓ プルタルコスの主張

①性的関係と友愛

少年たちを追い回すのは、少年たちとの身体的快楽を求めているからではないか?

偽善者であるのは、およしなさい!

友愛(フィリア)をなしうるという事実によって私たちのもの(異性愛)と異なるとは言わないで頂きたい!

自分が追いかけている青少年たちと性的関係を持っていることを認めて、その性的関係が友愛と両立不可能ではないこと、実際にあなた方はあなた方の愛人、愛されるものに対して、性的関係を持ちながらも友愛を抱いていることを受け入れて頂きたい!

⇒性的関係が友愛と両立不可能ではないという図式の提示。

②愛の発生源

男女固有のものではなく、両性に共通するものだ

※少女から少年に生じることだってある!

③エロスの範囲

エロスは、身体的結合にまで到達しないのであれば、未完成にとどまるのでは。

⇒身体的快楽という終点・目的がなければ、エロスはない！

3. カリス(親切・思いやり・ソフトな同意)(pp.220-226)

✓ 少年愛と女性愛

少年愛・・・スタジアムで少年たちが裸になったのは、ギリシア社会でも遅い時期のこと

＝愛の神話的一歴史的な起源によって欠陥があるもの

女性愛・・・プルタルコスの『エロス談義』には、身体的な共同性を含む愛であるにも関わらず、カリス(親切・思いやり)を媒介にすることで友愛に達することができるものだという記述がみられる

✓ カリス

女から男への承諾・同意。

望んで譲ること、積極的な身振りのうちに何かに同意すること。

女性が快楽の対象(客体)という自らの役割に主体として同一化するというやり方を可能にするもの。

＝カリスとは、快楽の対象という役割を意志に基づいて演じる仕方、進んで演じる仕方。

⇒女性愛においては、思いやり(ソフトな同意)によって、女は演じさせられる役割を受け入れる可能性を、それゆえ男に対するフィリア(友愛)を感じる可能性を有する。

↓なぜ、少年愛はカリスを感じられないのか

✓ 少年愛とカリスの関係

少年・・・やがて自由市民として兵士・政治家・父になる＝快楽の対象となる人物になれない！

快楽の対象になるとき＝彼の同意に反するときであり、いかなる尊厳も与えられない誰かになってしまう。

→男・少年の間にカリスはないといえる。(＝ソフトな同意がないともいえる)

✓ 古典期のギリシアにおける少年愛

根本から異なる愛として、少年愛があった。

→異性愛とは異なる別物の愛として切り離していたからこそ、自然・欲望・快楽の外にある愛として少年愛定義し、受容可能な反省可能なものと考えることができた。

＝異性愛・少年愛の2つは別物なので、優劣の評価はない。

✓ プルタルコス以降(ヘレニズム・ローマ文明)の少年愛

唯一の愛として同じ愛の中に包摂される(別の愛とはみなされない)

＝少年愛は拒絶されるものではないけれども、「唯一完全な大いなる愛」と比較して、親切心(カリス)を欠いた愛として劣ったものとみなされる。

⇒包摂しているけれども、標準と比べて劣った愛のあり方として評価される！！

✓ プルタルコス以降の男女の関係

少年愛が引き受けていた尊敬・友愛・信頼などの要素をすべて担っていく

欲望→友愛→カリス(思いやり・ソフトな同意)→共同生活→徳の順番で成長していくこと＝結婚

✓ 妻から夫へのソフトな同意

少年愛が引き受けていた教育の母型としての役割も、男女の結婚に引き継がれる

年上の女性・・・若い夫を導くことができる

夫の節度…夫が妻の道徳的監督のもとに置かれたから生まれるもの

女性…夫に振る舞い方を教えることができるため、夫は妻に対して悪態をつくことなく妻に対する権威を制限することができる＝妻が夫に権威を教えることができるという関係性の誕生

4. H 松のコメント

気になった点が 2 つありました。どちらも、唯一の愛の解釈についてです。

①少年愛と唯一の愛の関係性について：

少年愛も結婚も同じエロスに基づいているじゃん！同じ愛じゃん！と包摂されるようになったからこそ、エロスの優劣を比べる議論が生まれ、少年愛は未完成な愛、不完全な愛と言われるようになったという理解でよいのか？少年愛を NG と拒絶するのではなく、少年愛も愛ですよと受け入れておいて、でも愛の完成形は結婚ですよ～と本質的に排除していく構造がプルタルコス以降生まれたと言いたいのか。

②「唯一の愛」といいつつ、結婚を完成形(最も優れた愛)としていることについて：

プルタルコスは、「愛(エロス)は 1 つしかない」と論じる一方、結婚を完成された愛として位置付けているように思える。愛が 1 つならば、序列が生まれないはずなのに、なぜ序列化すること前提の議論になっていたのか気になりました。